

---

# いつかの世界の魔術論

佐藤水道局

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつかの世界の魔術論

### 【Zコード】

N7272D

### 【作者名】

佐藤水道局

### 【あらすじ】

誰もが魔術を使える世界。日本の二大学府の一つ・関東魔術学院に通う北川奈々は、落ちこぼれの高校一年生。一月のある日、彼女のクラスに転校生がやって来た。しかしその転校生には何やら秘密があるようで、学園ファンタジーです。

## 第1話・転校生

「転校生、かあ……」

昼休み。ざわざわと騒がしい教室の真ん中あたりで、向かい合わせた二つの机を囲んで弁当箱を広げている三人の少女のうち、一人の少女が呟いた。

彼女の名前は北川奈々。背中まで伸ばした色素の薄い髪を、一房だけ頭の右側で結び、これまた色素の薄い瞳を持つ高校一年生。

「そういえば明日だつたか。どうした、奈々？ 何か気になる事でも？」

黒髪を短く切りそろえた少女が、イチゴ牛乳の紙パックにストローを突き刺しながら呟つ。

「そんなの言わなくとも分かるわよ。転校生って事はそれなりに優秀って事でしょ。どうせ奈々の事だから、また落ちこぼれるのを嘆いてんじゃないの」

ウエーブがかかった長い髪の少女が、サンドイッチを口に運びながら言い放つた。

「つ……図星です……」

奈々はワインナーの突き刺さったフォークを膝の上に置いた。

「やつぱりね」

長い髪の少女　　晶と、短い髪の少女　　京子は、顔を見合せて笑つた。

関東魔術学院といえば、西の関西魔術学院と並び、多くの優秀な魔術師を世に送り出してきた国立の中高大一貫教育機関である。政府の役人や軍隊のエースなどにも、ここの中高大OBは多い。この学校、特に大学の卒業生ともなれば、魔術師として確かな将来を約束されるため、毎年多くの受験生が日本各地から訪れる。

つまりこの学校は、国民の憧れ、エリートの集まりなのだ。

しかし。

「わたしも時々ね、思うの」

ワインナーを口に入れながら、奈々がぽつりと言つた。

「わたしなんかが、こんなエリート集団の中についてもいいのかな、つて」

そう言つて俯きこんだ奈々に、京子は慰めるように声を掛ける。  
「まあまあ。それでも高校まで来たのは、キミの実力だよ。実技がダメでも、奈々には筆記がある」

「そうね。それに、<放出>はいいとして、<治癒>を使える人なんてあまりいらないんだから、もつと自信を持ちなさいよ」

珍しい事に、他人をあまり褒めない晶までも、奈々を慰めた。

「……そうだね。奇跡的に高校まで来れたんだから、大学まで頑張つてみるよ」

「そうだよ、その意氣」

二人の励ましによつて、すっかり元気を取り戻した奈々。普段から能天氣気味の彼女は、深く落ち込む機会はめつたに無いのだ。

「じゃあね」

「うん、また明日」

放課後。学校からの最寄り駅改札口に消えていく一人に、奈々は手を振る。今日は三人で、駅前のお店をブラブラと見回つてきたのだ。

「さて、わたしも帰ろつと」

奈々も駅を出て、学校に向かつて歩き出した。実家が遠い生徒の殆どがそうであるように、彼女もまた校地内の寮で生活している。

「そうだ。美菜さんにケーキでも買って帰ろつ」

奈々はルームメイトである一年生の先輩の顔を思い浮かべた。喜

んで貰えたら嬉しいな、と思いながら。

「ありがとうございました」

駅前のおしゃれなケーキ屋。ここは学院の生徒達もよく利用している。小さな白い箱を手にした奈々は、店員の声を背に、ガラス戸から出た。

「うう、寒い」

奈々はケーキを漬さないように気を付けながら、マフラーをきつと巻く。地球温暖化によつて例年に比べ平均気温は高くなつてゐるらしいのだが、やはり一月の風というものは冷たい。学校へと向かう奈々の足取りは、自然と早くなつた。

その時。

「すみません」

不意に、背後から掛かる声。振り返つてみると、一人の少女が立つていた。

黒いダウンジャケットとジーンズ。背は奈々よりわずかに高く、肩まで伸ばした癖のない黒髪。ぱつちりとしたタレ目が印象的な、中性的で優しげな顔立ちの女の子。

「魔術学院はどちらですか？」

相手に見とれていた奈々は、ハッと我に返つた。あまりジロジロと見るのは失礼だ。慌てて口を開く。

「あつ、魔術学院ならわたしも今から行くところなので、一緒に行きますか？」

知らない男の人に着いて行くのは危ないけれど、同年代のしかも女の子なら、いくらなんでも危険はないだろ？。それにこの場合だと、着いて来るのはあつちの方だ。

「迷惑、じゃないですか？ 下校途中だつたら……」

「あつ大丈夫です。わたしは寮だから」 彼女は、奈々が制服を着ていたから気遣つたようだ。自分も帰るついでだからと説明すると、お願ひします、と言つて遠慮がちに笑つた。多分、良い人なのだろ

う。奈々は、彼女に対して好感を抱いた。

学校への道すがら、一人で色々な話をした。彼女の名前は八神有紀、明日からこの魔術学院に通う事になつて、つまり噂の転校生だった。

「明日からはクラスが一緒だね！……えーと、ゆうぢゃんつて呼んでいい？わたしの事は、奈々とかそんなのいいから」

「うん、いいよ。じゃあ私は奈々つて呼ぶね」

もともと奈々は人見知りをしない性格だから、有紀とはすぐに打ち解ける事ができた。いい友達になれそうだ。

「へ～ゆうぢゃんつて\*\*県から来たんだ。あれ、だつたらいっつちより関西の方が近いんじやない？」

「うん。そりなんだけどね、ちょっと事情があつて」

学校へと続く坂道を、他愛のない話をしながら上る。部活帰りの生徒や、残つて勉強をしていた生徒達と何回もすれ違つた。センタ一試験も近い。歩道脇に植わっているイチョウの木の枝は、葉が一枚残らず落ちてしまつたから寒々しい。剥き出しの膝に当たる風が冷たかつた。

「案内、ここまででいいよ。後は多分大丈夫。ありがとね、奈々」校門に入つて校舎が見えたあたりで、有紀は立ち止まつて振り返つた。

「ここまででいいの？あつ、ちなみに高等部の職員室は一棟の一階で、一般玄関はこの道を真つ直ぐ行つたところだよ」

「分かった。本当に今日は色々ありがとつね。じゃあまた明日」

「うん。ばいばい」

奈々は歩き去る有紀を見送つて、それからグラウンドの方へと歩き出した。

「わたしも早く帰らつと

その時。

ガサガサつ

「！？」

不意に背後で音がした。しかし何もない。

「何か白い尻尾みたいなのが見えたような……。まついいか」

寮は校門から離れた場所にある。相変わらず風が冷たいので、早く部屋に帰りたかった。

魔術学院高等部女子寮の定員は七十名。現在は、五十二名の生徒がここで生活している。コンクリートで「の字型に造られたその外見は飾り気がなく、無骨な印象を与える二階建ての建物だ。

奈々は靴を脱いで自分の靴箱に入れ、スリッパ代わりの赤い健康サンダルを履いた。そして自室がある一階へと向かう。

「帰りました」

二 五号室のドアを開けると、室内は暖かかった。

「お帰り、奈々ちゃん」

机に向かっていた一年生の森口美菜が振り返った。この寮では基本的に、同学年で同室になることはない。奈々はこの優しい先輩が大好きだった。

奈々は机の上に鞄とケーキの箱を置いた。

「美菜さん、駅前でケーキを買って來たので、一緒に食べませんか？」

「？」

「本当？ 嬉しいな」

「ちょっと待つて下さい」

奈々はベッドのカーテンを閉めて、手早く制服を着替えた。そして紙皿とプラスチックのフォークを一つずつ出す。その間に美菜はポットで紅茶を淹れていた。

「先輩、好きなの選んで下さい」

奈々が買ったのはチーズケーキとイチゴのタルト。美菜はタルト

を選んだ。

「そういえば奈々ちゃん、嬉しそうだね。何かあつたの？」

「すうじいですね先輩。何で分かるんですか？」

「何となく、かな」

「実はですね」

「そつか、転校生つて奈々ちゃんのクラスだったんだ。友達になれ  
て良かったね」

「はい！」

奈々は紅茶を飲んだ。甘い香りが体中を包む。早く明日になれば  
いいな、と思つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7272d/>

---

いつかの世界の魔術論

2010年10月26日04時23分発行